1989・4

通信・おなご

33

■発行・岩手県和賀郡和賀町長沼5-343-3・麗ら舎・小原麗子

貫がなし

――本式に南望が始まったわけだが、たいたい、家を建てねばなんねエからネ。あの時にネ、四、二〇〇円の補助金があったの。家、建てるとネ。だども、四、二〇〇円で、出ねエだをネ。

それで、斎藤慶志さんさネ、たのんだの。ちょうど、あそこで、製材所すてらもんだがネ。村会議員をすてらたえがなあ……。

慶志さんさ、たのんで、やってもらったが、十坪の家コで、柱も土台も松の木で、屋根は杉皮ネ。五百円で建てだんだが、せんせん貫のえってねエ家なの。

柱と柱の間さ貫づものえれるもんだが、それ、安いもんだがら、（経費のかからぬよう）、間に合ねエもんだがら、貫のえらねエ家サ。

風、吹いたら半分ぐりえ、ぶっころんでさんたの。また、代金も支払わねエうちにネ。慶志さんも損なもんだからネ、なんともならねエからネ、そえで金はかから、ブン投げですまったの。その仕事。半分ぐりえ仕上ったたえがな、半分は、ブン投げですまったの。

そういう苦労があってサ、なんとか、かんとが皆すて仕上げでサ。

その時、俺も、そごさ建でもらった……。

青木さんの奥さん。倒れですまったがら、建でないでいたの……。

青木さん。俺、しばらく、家、ねんがったを……。

「奥さん。家ねえがら、力がらえねもったえんちゃ。

青木さん。実家に居たの……。

皆、苦労すて、なんとか、かんとか、まとめで建でで入って……。ランプ生活だな……。

奥さん。建でたって……建でっぱなすだをね。なんにもすてねえだをねえ。戸、一枚あるわけじゃねえ。壁、塗っただけで……。ムシロ吊すてるんだを、みんな……。

青木さん。建具なんかえらねえ……。

奥さん。入れねえんだをねえ。なじょにか板を張って……。板張りだ。

肥料も食う――青木さん。戸とか、ガラスだとか不、配給になってきたの。どんどんどうにかく物資は流れできたもんだ。

着物とか毛布とがね、それを不、ガラスなんかきたって不、建具、戸がねえから使い用かねがべじゃナ。それを売るわけだ。

それが、ええ勘定値だも不。ガラスだから。

肥料なんかもきたもんだとも不、百の頃、既存農家だって、一反歩、なんぼって肥料欲しんだを。こっちだって欲しんだとも。おまんまに変えられねえからサ、肥料も売ってサ、へ笑）まんま食ったりサ。まず、なにも取れねえ……。

奥さん。最初はぜんぜん……。

青木さん。種イモなんかもなあ……。男爵のこーんな大きいヤツきたもんだ。そえずは売らねえで、まず、食っただねえか。（笑）

一番、開墾すて不、開墾の補助金で、まま食

ったの。

奥さん。最初、そうたね。

青木さん。それから、営農資金ず、銭コ借りでネ、営農資金も食ったの。だから、営農はすすまねえわけサ。ここは、非常に酸性の強え所でネ、PHが小さくて……。国産軽銀って、アルミ工場ね、その跡に、ゴッパ、ゴッパず、アルミ、今もあるそうだが、あれがこう……交ってるもんだからね。

火山灰土で、悪りだね。リン酸やっても、リン酸、食ってしまう土なんだな。うだから、ホウレン草、蒔りだって、芽は、パーッ出るんだよ。あがらんでネ、消えでなぐなってしまうの。

ジャガイモなんかは、酸性に強えな、ヒエどが、アワどが、そういうのは、まず、えんがったんだ。

これで、わかねえという事で、県にも何回も足運んでサ。その間に、栄団は解散すたの。栄団解散すたのは、二十四年頃がな。

奴ら、補助金の頭はねで、食ったりサ。

われわれさ来た、仲間を横取りしたりネ。そういう事で、県下の開拓者は、皆、かがって、怒えでサ、大会を開いでネ。

当時の八南程っていう組合長が、きかねぐなって、そすて、栄団、づっぷすてさんたの。そすて県さ、開拓課ずの置いでネ。

栄団、づっぷすて、今度、県さ直属にすたの。

そすて、一番最初にやった事業が土壌改良事業だな。酸性を中和する事業が、一番最初だな。

仲人七郎兵衛―青木さん。二十四年だが、ががもらたの……。兄貴、還って来たたがらネ。

実家さ、もらったのサ。仲人な。俺の姉、嫁った所の舅姑さまでな、そうは（口達者）が、えくてな。（笑）

奥さん。はっぱり知らなかった。東京の方さ、行ってらたがら。ただ、嫁にもらえたの。

終戦で帰って来てらた。百姓の百の字も知らねえのすネ。そすて、ホラ、開墾あるずの知らねえ

だをね。ぜんぜん、わがねえの。

青木さん・俺の仲人爺さまな、南部って言わねえすをの……。

奥さん・農協さ勤めでら、農協の月給取りだって……。

青木さん・田は三反歩あるス、畑コあるス、てな。農協さ勤めでる月給取りだって……。（笑）ボボーッと……。「仲人のウソ七駄（※）片荷」ってな。ボボーッと、言うたそうた。（笑）二十四匁にもらったが……て、春、もらったがて、

奥さん・うん……。

青木さん・春、来た衣、秋物、取れたらば……。

奥さん・分れるべ（分家）って……。

青木さん・分けて衣、南部（南部）さ残るべスかあ、こんだあ、という事で、実家に居たのサ。そのうちに、今度

兄貴ど、ケンカすてさんたを衣。（笑）「そったら、あべ……」ず事で、夏頃が……。

奥さん・秋、近がったの……。

青木さん・秋物、取れねえにな。

奥さん・取れるが、取れねえに……。

青木さん・米コ、一斗ビサ、味噌コ

奥さん・バケツさ、一つぐりえ……。

青木さん・もらってなあ……。

奥さん・なんーんにもねがったをの。来て見たえば、戸、一枚ねえたもの……。（つづく）

※七駄は七頭の馬につける荷・それが、一頭の馬につける荷の半分もないこと。

へ一九八二年一月三日／北上市飯豊町／青木勝三さん・62歳・青木ミキさん・54歳／談〉

祖母

高橋　ミヨ

もう一つの心配は、祖母の健康のことであった。祖母が、六十歳をこえてから、中風にかかり、しばらく寝込んだことがあった。

近所の人達や、思いがけない人などそれは多くの人が見舞いに来てくれた。生活の苦しい人でも、手作りの小餅とか、川でとれた魚の干したものとか、缶詰から薬まで、なかにはわけのわからない良薬など、口の中あ、モがモがいいと笑いながら、口いっぱいにひろがった薬を飲んでいたこともあった。

最初は、もう助からないと思ったらしく、私たち兄妹に、一人一枚ずつの五十銭硬貨を、かたみとしてわけてくれた。父は、祖母の手から貰ったものだからと、名前を書いた紙を張り、大切にしまっておいて、大きくなってから返してくれた。

それは、今でも持っている。

しかし、右手が不自由になり、少し言語障害が残っただけで、祖母は起きあがってくれた。もう、息子の手伝いに行くことも、大きな仕事は出来なくなったけれど、また、麻縫りとかつぎもの位は出来るようになった。

そのころから私は、祖母にホめるだけではなく、大切にするようになった。母は、自分が祖母にしてもらっていたことを、少しずつ、私たち孫にやらせるようにした。ことに私は、「お前は婆の世話になっているのだから、これ位はしなくてはし」とよく言われ、私も納得してその気になってきた。

その気になっても、子供のこと、あまりやりたいものではなく、ことに、学校が休みの日など結わされた祖母の髪は、やわらかくて腰がなく、毛が少ない上に直ん中を五、六糎位、丸く剃っていてその部分が見えないように結うには、子供の手ではなかなかむずかしく、合格するのは、大変な

ことであった。

しかし、何年かするうちに気に入るようになり、だんだん楽な気持で結んだ。

次は肩たたき、両手をまっすぐ横にして、小指のところで、「とんとん」と叩く、あまり強くなく軽く叩くと、「ああ、いい気持、さっぱりしたよ」と、よろこんでくれた。そしてまだ大事なもの、夜、おしっこするための、片方だけ手のついた便器を寝床のそばに持ってゆくことだった。

朝になると、またそれを便所に持ってゆき、冷たったら熱いお湯をそれて小さな草箒で洗い、ふせてかわかしておいて、きちんとする。もちろん、母も妹も、手のすいている人は手伝ってくれたが、これはお前の仕事だと母に言われていたし、自分でもそう思っているのに、なかなかよろこんでというわけにはいかなかった。

間こえないふり、忘れたふりをすると、すぐ母の目が光り底むしりにらみつけられた。

だんだん、祖母の世話は、私がする方が本当だと思うようになり、どうせするならおもしろおかしく気をまぎらした方がうくだとでも思ったのだろうか、その頃、祖父の甥が駄の牛乳売子になったばかりで、あの呼び声がなかなか出ないで弱っているとこぼしていたのを聞いて、「たいしたことでないのに、おもしろそうなのに」と思ったのがはじまりなのか、今ではわからないが、便器を持って声をはりあげ、「ハアーンに牛乳、ぎゅにゅ」と、口真似しているうちに、「おべんとう、おべんとう」「お茶お茶お茶っ」とやるようになった。

皆は笑うし妹たちも真似をするようになり、当時、この便器を「おかわり」と言っていたのに、家では、みんな弁当というようになった。

お客さまの時など、私がわすれていたりすると、祖母が声をひそめることもなく、「ミツ、べんと」と言えば、裏口から運んでおけるので便利であった。

祖母はよく、腹が痛い、風邪だと病気をしたり、ころんでけがをするようになった。私はその度に死ぬのではないかと心配し、死ぬなよ死ぬなよと、一日中祖母のそばをはなれず看病した。

母の作った病人食を一さじ一さじ口に入れてや

り、その度に、おいしいか、おいしくないか、もっと食べろ、いやでも食べろと、今思えば祖母を案ずるあまり、休みの日には外にも出ずにそばにいて、自分の気のすむやり方で看病し、かえって迷惑だったろうと思う。

しかし、体の調子の良い時には、杖をついて畑をまわってみたり、林の中を歩いてみることもあり、そうした時は、私の心はのどかでたのしかった。

（つづく）

戦の庭のくらし歳月・7

長女誕生と空襲警報

川崎タツエ

昭和十九年（一九四四）、長女美智代が生まれました。とうすでに B29 が偵察に来襲することは度々でした。夜は燈火管制で暗く、赤ちゃんの入浴にも気をつかいました。庭には防空壕を堀り、これは手づくりの壕ですから屋根もなく畳を一枚はがして蓋にするのですが雨が降れば蓋をとって家にしき悪戦苦闘です。

ラジオの東部管区情報をききサイレンをきき、隣組の班長さんのメガホンの連呼の声をきき、一日中があわただしくなります。赤ちゃんは敏感でサイレンのうなる様な音をきくとしがみつく様にこわがって泣き、おっぱいを飲ませようとしても吸いません。

警報が鳴ると竹行李に、おしめ、湯たんぽ、そして美智代を入れて、防空壕に運びます。そして解除のしらせがあるまで壕に潜みます。病人などは大変だったと思います。私の家にはお風呂場はあっても風呂桶がありません。忠宗は隊で入ってきましたが私と美智代は銭湯を利用していました。

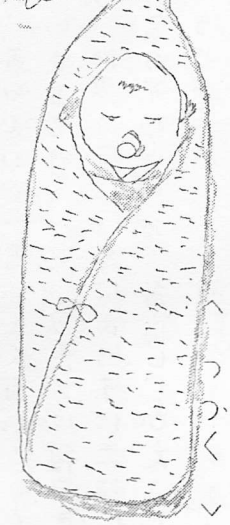
風呂桶があっても燃料がなくて風呂は沸すことはできません。

ある日、いつものように明るい中に警報を気にしながら銭湯に出かけました。お風呂から、あがろうとしたらサイレンが鳴りました。警戒警報です。急いで着物を着せ外に出たらサイレンは空

警報に変わり、ウーウーと鳴るというより吠えています。どうしようと思ったけど知っている人もなく広い道路を走りました。人っこ一人通っていません。上空から轟音がきこえてきます。その中、半鐘の七点打ちが鳴りました。七点打ちは、退避の合図です。壕から出るなの合図です。でも私は、走る以外にありません。無気味に打ち鳴らされる七点打ちの半鐘、恐怖感いっぱい無事家に着きました。偵察だったのでしょう。家に着いたトタン気が抜けた状態でした。この事が隣組の組長さんに知れ、あぶないから私の家の風呂に入る様にとすすめてくれました。私もとても怖かったので、厚意に甘えてれていただきました。

しかも、赤ちゃんだから早い中に入れる様にと多分一番先にむかえに来てくれ恐縮しました。

水戸の隣組の人たちはじやさしい、いい人たちでした。



〈つづく〉

お手紙

『おなご・32』、今もう一度よみ返しながら、ペンをとったのですが、〝祖母〟を読み、私も私の祖母のことを思い出し、なぜかとてもなつかしくはな水！をたらしたところです。つかぜをひいているせいもあるのでしょうか、涙と一緒でぐしぐしよくしよです。〉

死んだ人間が生きている人間の中に、いまも決して死なないで生きている――そのぬくもり、語りかが思いだされ、思い出というこの不思議な作用をしてくれる祖ぼうに感謝しています。

こうして思いだし、したう限り祖母も祖父も私の中で決して死なず、なんどもよみ返えり、生き生きとした生を与えてくれます。

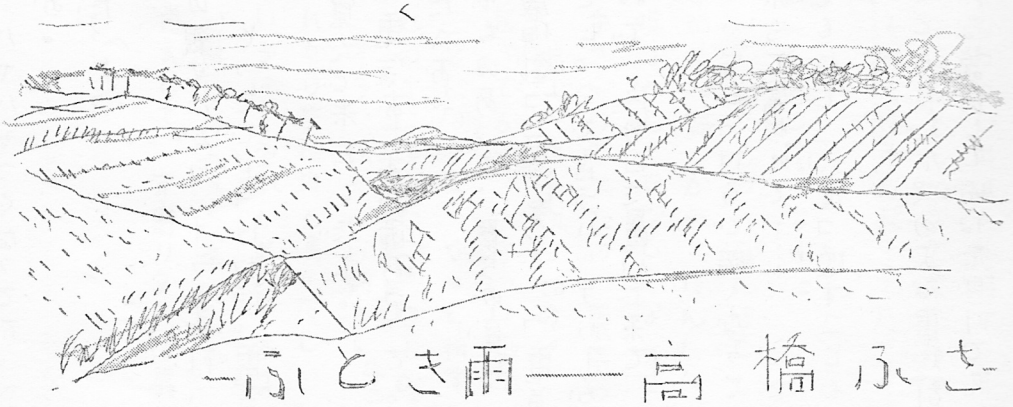
その作用、呼びかけ（こちらからか、あちらからか）を感じることのできる幼年時代をもったということは、とても幸福ですね。死者から力を得るということ……驚くにあたいする出来事です。

ミリさんの文章を読み私も祖母と共にねむった夜のことを思いだしました。（略）'88・4・19

盛岡市厨川・東野久美子

たろいの里・ふさの歌・2

隣村の祭りのはやしが育苗のビニールハウスに居れば聞こゆる
剪定をしたるリンゴの広き畑梢あかきに雨ふりそそぐ
ふとき雨植田をたたき一せいに稚なき苗の水にかくるる
田を走る風に体のゆらぎつつ稚なき苗の補植をしたり
鎌を研ぐ砥石の直ぐに乾きくる暑さのなかにけだるくゐたり
五百本のピーマンの枝をつり終へてビニールの紐の白くかがやく
やうやくに釣を覚えし六十の夫は出でゆく梅雨にぬれつつ
暑き日のきはまる刻に見る限り田麦の芒は青天に立つ
休み田のあかき杉苗幾年も短かきままに草に埋もるる
低温にあひて稔らぬ早稲の田に夫は今日も出でて草刈る



ふとき雨——高橋ふさ

根の乳(ち)便り

垂(たら)里

まつを媼・南書 9

26 石川純子

オレの親父、何でも新しいごとやりでがる性で、家の中さ、大工切らしたごとねエ人だっタ……

ンだから、南部田へ村じさ「電気」引っぱぺて、皆を奉仕に連れでって、山がら木切って来たり、電気柱をたがが世だりスて……

親父も電気柱たがりで助(す)けで、その時カんだのがもとで、脳いっ血おごして、二週間で死んでスまタ……

卒先して、何だりかんだり先に立ってやる人だったもの。

酒飲みだったから、ハヤハヤつぐなってて、恐(あぶな)スぐ力出したンだべお。

――ン、大正八年だったヨ。

一体(いって)で、その通りの親父だから、オラ家では、それよりずっと前(めー)に、どっこでもつけね時、電気つけでたの。

親父、蓄電ッもの覚えて来たンだネ。

水車をしてる家で、電気おこす設備あるって。

タービンの原理だべお。

「あそごに電気ッものあって、買うの良(い)」て、オレ、十一、二歳頃銭コ二銭もらって、「電気入れでもらって来うて」。今で言うバッテリーかて、そいづ背負わされで、戸の口さ置いで来て、また取りさ行ぐ……

家さ持って来て、二、三日つけるど暗ぐなって、またれでもらって来うて言われで……

ランプ掃除すッごともねし、火屋(ほや)コ壊(ぼっこ)すごともねし、喜んで行ったタ……

「電気れれで来ねくとも良(い)。水沢のよな電燈引っぱて来る」て、みんな説得して始(はじ)めねばりで死

ンだンだな。
自分が主催して電気つけッぺとして死んでスまたなンて、ホニ、親父らしいチャな。

この小山(村)さ電気来たのは、それから二年後。今度ア、オラ家のおじいちゃん(夫)が先立って、、、、

電気つけッぺて、家の仕事しねで出はて歩ぐがらて、お姑さんダ逆言してたッタ。
反対する人もいたの、村に。
清一っあんて、石油売って商いしてだん。(笑)
電気来た時ア、うれしかったなア。
ランプで御飯終ッと、灯いだましね (もったいないし、早く消せ消せて、お姑さんダ、炉端さ火たいて、その明りで暮らしてたンだもの。
電気は夜しか来ねくて、10燭光たっけがて、
今みでなメーターなんッのねの。何燭光て契約すッと、消しても消さねくても同じ値段だタから、線長ぐして、大きな玉コつけで、、、。電気調べ来た時、そいづ見つけられで罰金取ウれだ時代あったもな。

ンだから、大きな玉コつけで出はった時ア、恐い出すと、どッこさ行ってでもどッって来たの。
夜通しつかってンだもの、夜通し起きでだごとあンの。
たった一つの電燈囲んで稼ンだヨ。
「この位、あがしついでンだもの、なんぼでも稼ぐの良がすして、お姑さん語っから、だんだんに、電気来たハレで、嫁ゴかえってねでぐなって、
帯戸だの板目ふき、手さぐりでスたの、電気ついだキャ見えるもの、嫁ゴの仕事切りねの。
時々電気切れるごと起きでがら、一杯つけでおぐと火屋コが切れるッごとになって、やっと消すよになって、嫁ゴも眠れるよになったこでねーが。
「あかりして言えば、オラ、松火から知って(笑)るヨ。松火、松明、それから茶種油を使ったし、それにランプ。石油という燃える水が出たッのは驚威的だったけっと、電気はもっと驚威的でなんぼ吹いでもこの灯消えねて、年寄りダ、団扇で扇いだンだド、、、、(笑)

橋を渡る日々——5

みぞれの日・5

×月×日

「『ごめんください。ごめんください』かわいらしい小さな女の子がやってきたのであります。

（私は買われてしまうのではないかしら）フランス人形はドキドキしておりました。

『このフランス人形くださいな』女の子は元気よくいいました。」

そこで、一頁はおわり、二頁には、絵が描かれてあります。手前に、くるみわり人形が描かれ、人形は長目の帽子をかぶっております。店の人より、女の子の方が、背が高いのです。

「フランス人形は買われてしまったのであります。それをみたくるみわり人形は、ひどくがっかりしんだのであります。」

「のであります。」と、みなこちゃんが読むので、今風、大きな目のフランス人形に、背骨が、ピッと入るような気分になってしまいます。

「フランス人形もかなしみました。「もう、くるみわりさんに会えないのかしら。」

そう思うと、本当に悲しくなってしまいました。」

「本当に悲しく」と、そこは、漢字なのです。

山原ミチさん（『あの人は帰ってこなかった』）は、夫が出征して征く前の晩のことを、つぎのように語っています。

「明日（あした）たつという前の晩、みんな集って（たちぐるまい）出征祝してくれた時、あの人急に座敷から見えなくなってしまったノス。オレ、どこさ行ったべ、と思ってさがしたれば、暗い納屋（へや）（寝所）の床の上さ黙ってあぐらかいて座っていたノス。オレのところ見たれば、『俺なあ、ここ』っていったっきり黙って動かないで座っていたっけも。今でも、オレ、ハ、その気持わかるマス。だれェナッス、喜んで行くハ、とこの世界にあるべナッス。酒のんだって、騒いだって、なんぼしてその気持消えるべナッス。オレもハ、泣いでりしまって、ちくなカ付けも出来ないでしまったったも。」と。

（つづく）